

## 自分史のすすめ（上）

一生まれてよかつた、生きていてよかつた――

どれほど人は

自らを知らずにいるか

自分の書いたものを読みかえして

初めて気づく

ヴァレリー

### I 人はなぜ「生」を記すのか

#### 1、「生きた証」を残したい

(1) 「朝日新聞」平成10年3月13日「『三池』それから」第2回――「少女坑夫」時代の記憶／母は80歳で書き留めた――

八歳のとき、一家は筑豊の庄制ヤマから三池へ逃走した。金がなくて、小学校にいかせてもらえないかった。  
①八十歳になって一大決心したキミ子さんは、地域のペン習字教室に通った。初めて文字を獲得できた。そして、  
②日めくり暦の裏に自分の「生」をつづった。

かんてらの火がきえたら、しんのやみです。そんなとき、母がすらにかんてらを下げるあかりが見

えると、うれしくて、ほつとしました。

炭坑、機織り、子守の奉公……。家計を支えるため働きずくめだった。十六歳で大牟田にあった紡績工場の採用試験を受けた。

せんせいがへんをにぎってといわれました。しつかりにぎってといわれました。その上から私の手をしつかりおさへてかいてくださいました。そのとき、私の目からなみだが、ぼたぼたおちました。

日めくり暦の手記は三十枚。キミ子さんが病に倒れ、中断を余儀なくされた。十七歳でとぎれています。

#### (2) 中島輝洋子歌集『いま、生きん』自序

私が短歌を詠むきっかけになつたのは、今から六年ほど前、看護婦の前川さんとの出会いからでした。初めの頃は短歌や俳句に余り関心がありませんでしたが、ある日、一首の彼女の歌にショックを受け共感を覚えました。「あ、私もこんなに短い言葉で、情景や詩情までも表現して他人を感動させたらいいな」と羨ましい才能に感動し憧れ始めました。

その前川さんの歌は、

①夜勤より戻れば卓に今日抜けし乳歯に子の文添えられてあり

という歌でした。

この歌は、看護婦という三交代の仕事上、ご主人や子供達とのすれ違いの生活が多く、夕食を共にできなかつた母親が、家族の寂しさに満ちた家に真夜中に帰宅し、家人を起こさないように食卓にそっと電燈をつけ我が子の今日の手がかりを探す。

乳歯が初めて抜けた子供の方は、少しでも早くお母さんに聞いて貰いたい衝動を必死でメモに書いている気持ちが、この一首に伝わってくるのです。（中略）

今考えても親不孝ばかりしていた気がします。②こんな自分を思い出した時、母の事を歌に詠んでみたい、子供の自分や年老いていく両親、姉弟、そして何よりも生きている証として自分を残したいと思うようになりました。

私が初めて作った歌は、③「夜勤明けのまぶた重きを知りながら母にまつはる幼な日の我れ」でした。

— 第21回俳人協会新人賞を受賞した北村保さん「手足は不自由ですが、心は自由です」 —

地元の町職員だった二十歳の時、交通事故に遭い、全身まひとなつた。五年間の入院生活。退院後、「<sup>①</sup>希望が欲しかつた」と俳句の世界へのめり込む。それから約二十年、芭蕉生誕の地といわれる三重県伊賀町で句作を続ける。(中略)

とはいゝ、なまやさしい日々ではなかつた。<sup>②</sup>手術をしても、リハビリをしても、手足は動かない。「死にたい」と思い続けていた。母美恵子さんに何度も「毒薬を飲ませてくれ」と懇願した。物を投げつけることもできず、水飲み用のアルミのやかんの口にグアッとかみついて、<sup>③</sup>理不尽な運命と闘つてきた。

入院中、「何をじじむさい」と、勧められながら取り合わなかつた俳句。<sup>④</sup>だが、この十七字の世界に結局、救いを求めた。(中略)

「こほろぎと一つの間に眠りたし」—三年前、一時入院した折に作った句が自分では気に入つてゐる。初めて句集に序文を寄せた東京の俳句結社の主宰者は「君もこういう境地にたどりついたか」とたたえた。「自然と一体になれる句を作りたい。<sup>⑤</sup>俳句は私にとって生きているあかしです」

#### (4) 斎藤史歌集『ひたくれなる』

死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなるの生ならずやも

#### (5) 円谷幸吉選手の遺書

東京オリンピックのマラソン競技で銅メダルに輝いた円谷幸吉選手が、東京練馬の陸上自衛隊体育学校の宿舎で頸動脈を切つて自殺をした際、家族宛と上官宛の二通の遺書が残されました。とりわけ家族宛の遺書は心に沁みるものがあります。円谷選手は、家族や親戚への「最後のことば」を、正月休みに帰省した折に振る舞われた〈食〉に託して、次のように記しています。

父上様、母上様、三日、とろろ、美味しうございました。干し柿、モチも美味しうございました。敏雄兄、姉上様、おもし美味しうございました。克美兄、姉上様、ブドウ酒とリンゴ美味しうございました。

巖兄、姉上様、しそめし、南ばん漬け美味しうございました。喜久造兄、姉上様、ブドウ液、養命酒美味しうございました。又いつも洗濯ありがとうございました。

幸造兄、姉上様、往復車に便乗させて戴き有り難うございました。モンゴいか美味しうございました。正男兄、姉上様、お氣を遣わして大変申しわけありませんでした。

幸雄君、秀雄君、幹雄君、敏子ちゃん、ひで子ちゃん、良介君、敬久君、みよ子ちゃん、ゆき江ちゃん、光江ちゃん、彰ちゃん、芳幸君、恵子ちゃん、幸栄君、裕ちゃん、キーチャン、正嗣君、立派な人になつて下さい。

父上様、母上様。幸吉はもうすっかり疲れ切つてしまつて走れません。何卒お許し下さい。気が休まるごともなく、御苦労、御心配をお掛け致し申しわけありません。幸吉は父上、母上様の側で暮らしとうございました。

## 2、誰かの〈思い出〉の中に残りたい—記憶されることで生きる—

#### (1) 『きけ わだつみのこえ』

『きけ わだつみのこえ』という本の名を「存じでしようか。戦時下、学問の道半ばにして異国の山河に倒れた戦没学生の手記を編んだ書です。岩波文庫『きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記』(昭和57年、岩波書店)、同『第二集』(昭和63年、岩波書店)があり、平成7年には、同じく岩波文庫として『新版きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記』が刊行されています。新版には渡辺一夫氏の筆になる「『新版 きけ わだつみのこえ』の読者へ」という序文があり、次のような一節があります。

死者は記憶されることで生きる。時代の推移と状況の変化にもかかわらず、読者に受けとめようとする誠実な意志があるかぎり、戦没学生のどの言葉も、読者の胸に刻まれるにちがいない。

## (2) ジャン・タルジュー「詩人の光榮」

死んだ人々は、還つてこない以上  
生き残った人々は、何が判ればいい？

死んだ人々には、慨く術もない以上  
生き残った人々は、誰のこと、何を、概いたらしい？

【参考】中野孝次「過去からの呼び声」  
中野孝次氏は、「われわれが彼らの思い出を  
もう一度甦らせ、彼らを懐ぶことによって生き  
返らせること」が「生者たちの義務」であり、  
「彼らへの最大の供養」となる、と説く。

死んだ人々は、もはや黙ってはいられぬ以上、  
生き残った人々は沈黙を守るべきなのか？

### (3) 宮本輝「父がくれたもの」

宮本氏は、『流転の海』（福武書店）の「あとがき」の中で、父親が自分にとつて「不可解な人間」であった、と記しています。少年時代の作者は「そんな父がうとましくてなら」ず「それは殆ど憎しみといつていいほどであった」（宮本輝「正月の静寂」）らしく、「父がたまに家に帰つてくると、私は何やかやと口実を作つて表に出で行き、出来るだけ顔を合わさないようにしていました。まして、「私が二十一歳のとき」、父親には借財までも残されて逝かれてしまします。その額は「父、死亡。残った借財の大きさに、一、二ヵ月ぼうとしていた」（宮本輝「二十代の履歴書」）と記されるほどですから、莫大なものだったでしょう。返済など出来るはずもなく、「取り立て屋と称される怖いお兄さんたち」から逃れるように、「母と私は、すたごら夜逃げときめこんで、大阪府の東のはずれ、大東市住道という地に引っ越」し、以後しばらく居を転々とし、「希望もなければ目標もない。嫌悪もなければ焦燥もない。父の残した借金があるのみ」（宮本輝「スバルタカスのテーマ」）の日々を送るのです。

二十代のとっぱながら流転を余儀なくされる日々。これでは亡父に対して怨嗟の声でもぶつけたくもありますが、作者は時を経て、二人の子の親となり、次のように父を見つめ直すのです。

父は五十歳で子の親となつたが、私は二十八歳でふたりの子の親になつた。だが、父という存在にある特別な思いを抱くようになったのは、私が子の親になつたからではない。私が小説を書くようになつたからである。そのことに、私は最近になって気づいた。<sup>①</sup> 父との思い出はさまざまなもののが複雑にもつれ合つて、ひとことで言い表わすことなど出来はしないのだが、<sup>②</sup> 私を溺愛し、どんな人間でもいい、ただ大きくなつて欲しいと念じつづけてくれた人がこの世にあつたということを、筆舌に尽くしがたい感謝の念で思い起こすのである。父の買つてくれた本、父の観せてくれた映画、父の塗つてくれた睡、そして身をもつて私に示してくれた精神病院での、終生忘されることのない臨終の姿。<sup>③</sup> いま私はそれら数限りない父からもらつたものを懐におさめて、小説を書いているのだ。

### 【参考】父の死後、父を〈書く〉ことで〈理解〉する

作者にとって父は愛憎なからずするアンビバレンスの対象であり、「父との思い出はさまざまなもののが複雑にもつれ合つて、ひとことで言い表わすこと」（傍線①）など出来はしません。しかし、父の死後十年、時の浄化を経て、宮本氏は、「五十歳でやっと初めての子供を得た父が、六十五歳になつて事業に敗れ、何もかもを失つたとき、自分の一人息子がまだ中学生でしかなく、しかも勉強ぎらいで虚弱体質であることを思い知れば、やはりどうしようもない焦りといらだちをいだいたに違ひなかつた」と「このほか私を溺愛していた父のそんな心情が、しみじみと理解できる」（宮本輝「正月の静寂」）ようになり、「私を溺愛し、どんな人間でもいい、ただ大きくなつて欲しいと念じつづけてくれた人がこの世にあつたということを、筆舌に尽くしがたい感謝の念で思い起し、舌に尽くしがたい感謝の念で思い起し」（傍線②）のです。

本当に「死者は記憶されることで生きる」のですね。宮本氏が恩讐を越えて、父との思い出を「懐におさめて、小説を書いているのだ」と繰る時、「父」は宮本氏の心の中に、その文学世界の中に生き続けていくのです。同じように、文章の一言一行に亡き人を封じ込め、自らを刻み込むことも、時間を越えて「記憶されることで生き」ていくための大切な営みと言えます。

(4) 西村玲子「誰かの思い出の中に美しく残っていたい」

親しくしていた人が三年前に亡くなり、その人のことを思い出さない日は一日としてない。思い出の中で生きているその人は美しい。私が生きている限り思い出が生きているのだから、ことさら、自分の生きざまを主張するよりも自然にしていいと思える。

(中略) ①それが誰かの思い出の中に美しく残ってくれたら幸せだ。②思い出してもらえる魅力的な人間になりたい。息子や娘たちは私をどんなふうに思い出すだろうか、友だちはどんなところで思い出してくれるのだろうか。ヴェルレーヌの詩で、③死んだ女より哀れなのは忘れられた女だと言う。どんなに「生きた証」を消したくても残していくものだ。

### 3、「記憶」を共有し、より長く保存する　—言葉の記念碑—

(1) 『朝日新聞』平成10年3月4日夕刊「人と人との物語」第14回—「上野英信と松下竜」—その三—

①四六年、京大支那文学科に編入學するが、翌年中退して筑豊へ赴く。この一大転機の事情は明らかでない。「なぜ選りよつて坑夫になつたのか」という質問をよく受けるが、うまく答えることはむつかしい。私自身、よくわからないのである」と書いている。出来心。気の迷い。「あるいは、魔がさしたと言つてよからう」学歴を「小学校卒」として小炭鉱に入るが、「学歴詐称」で即解雇。別のヤマに移り、掘進や採炭の労働に従事する。長崎の海底炭鉱へ行き、筑豊に舞い戻り、②「誰にも負けない腕と人間味をもつ掘進サキヤマとして一生をヤマで終えたい」と願っていたが、「日共秘密党員」の坑内見学したかどで馘首され、望みは断たれた。このとき、かつてともに働いた友人たちの言葉が、上野のそれからを決める。

「飯のことは心配せんよか。アゴは干させん。③あんたは字が書けるとやけ、書いておれたちに読ませない、面白か話ば。頬つちよるばい」

六十一年（昭和三十五年）八月、『追われゆく坑夫たち』を出す。その「あとがき」に「なぜ書くのか」と自問してこう記している。

やはりその最大の理由は、私以外にだれひとりとして書く者がいなかつたからだ、というほかない。だ

れも書きとめず、したがつてだれも知られないままに消え去つてゆく坑夫たちの血痕を、せめて一日なり

とも一年なりとも長く保存しておきたいというひそかな願いからであり、そうせずにはおれなかつたからである。

(2) 井上ひさし「言葉の記念碑つくる時」（『読売新聞』平成12年1月3日）

井上ひさし氏は、「言葉の記念碑つくる時」（『読売新聞』平成十二年一月三日）の中で、「日に何回も言つたり書いたりして便利重宝に使つてゐる言葉」でありながら「さて真正面から向き合うと、途端になにがなんだかわからなくなつて途方に暮れてしまう」代表格に「記憶」ということばを掲げて、これが習慣や學習や知識と異なることを指摘し、「たとえ習慣や學習や知識がなくても、私はやっぱり私であり人間であつて、そんなものがなくとも生きて行けるということです」とした上で、次のように記しています。

ところが、幼いころに父を失つて淋しい思いをしたことや、中年になつて妻に駆け落ちされて苦しく切なく口惜しい思いをしたことなどを忘れては、①私はもはや私ではなくなります。人間ではなくなります。つまり、こうした思いの数々が現在の私をつくりあげているのであって、これこそが記憶です。（中略）

これらは同じ時代に奇蹟的に生まれ合させた「私たち」の記憶の一部をなしてゐるわけですから、これらを一人占めにして勝手にお墓へと持つて行くことはできません。③こういった社会的記憶はできるだけ多く、できるだけはつきりとした言葉にして公の記憶の貯蔵庫にたくわえておくべきです。

④他人と語ることによって他人と何かを共有する。それなしでは、この国の行く末を、この国の未来を、たしかなものとして、イメージすることができないからです。  
べつに言えば、世紀と世紀の裂け目の今ほど、⑤先行きのための言葉のモニュメント、記念碑をつくるのにつさわしい時期はないでしょう。  
「いぞんじのようにモニュメントの意味は「思い出させるもの」です。

#### 4、〈自分〉を照らし出す

##### (1) 池上嘉彦「言葉についての新しい認識」

日頃見慣れた景色——たとえば、自分の家の玄関の造りや庭のただずまいなど——がある時、ふと、まるで初めて見る時のように、新しく、珍しく感じられることがある。そのような経験をする時、① 私たちは日常、田で見ているつもりでいながら、それでいて実は何も見ていないのだ。

② 言葉についても同じである。日ごろ使い慣れているがために、私たちは自分の使う言葉については大体何でもわかっているつもりでいる。ところが、ふとした機会に、③ 実はそれが勝手な思い込みであったことに気づいて、はつとすることがある。子どもたちは、そのような機会をしばしば与えてくれる。「『ネコはどうしてネコと言うの』」「ハンバーグとハンドバックは似ているね。おかしいね」

日頃見慣れた景色 ⇔ 言葉についても同じである ⇔ 「自分」についても同じである

\* 1枚目巻頭  
詩を参照。

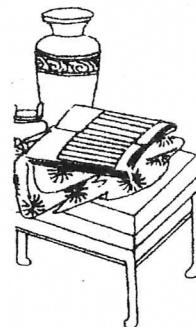
##### (2) 「主人公起きる」——惟儼禪師(『仙仏奇蹟』より)



栗山惟儼禪師

##### (3) 萩木のり子「苦しみの日々 哀しみの日々」(『倚りかからず』所収)

ところで、萩木のり子という詩人をご存じでしょうか。川崎弘らとともに、「權」という詩誌を発行し戦後詩壇をリードした才媛です。大正15年生まれ、今年75歳です。この詩人の最新詩集が『倚りかからず』(筑摩書房)です。



##### (3) 萩木のり子「苦しみの日々 哀しみの日々」(『倚りかからず』所収)

それはひとを少しばかり深くするだろう  
わずか五ミリぐらいではあろうけれど  
さなかには心臓も凍結  
息をするのがえらいほどだが  
なんとか通り抜けたとき 初めて気付く  
あれはみずからを養うに足る時間であったと

##### 受け止めるしかない

折々の小さな刺や 病でさえも  
はしゃぎや浮かれのなかには  
②自己省察の要素は皆無なのだから

少しづつ 少しづつ深くなつてゆけば  
やがては解るようになるだろう  
人の痛みも 枇杷のよくな傷口も  
わかつたとてどうなるものでもないけれど  
(わからないよりはいいだろう)

少しづつ 少しづつ深くなつてゆけば  
やがては解るようになるだろう  
人の痛みも 枇杷のよくな傷口も  
わかつたとてどうなるものでもないけれど  
(わからないよりはいいだろう)

①「生きた証」を残したい

②誰かの「思い出」の中に残りたい—記憶されることで生きる—

人はなぜ「生」を記すのか

③「記憶」を共有し、より長く保存する—とばの記念碑—

④「自分」を照らし出す

「自分史」執筆の動機

## 1、「自分史」を書いてみませんか

「自分史」とは—色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』—  
 人は誰しも歴史を持っている。どんな町の片隅の陋巷くろうこうに住む「庶民」といわれる者でも、その人なりの歴史をもっている。それはささやかなもあるかもしれない。誰にも顧みられず、ただ時の流れに消え去るものであるかもしれない。しかし、その人なりの歴史、個人史は当人にとってかけがえのない「生きた証」であり、無限の想い出を秘めた喜怒哀歎の足跡なのである。

## 2、「自分史」執筆の意義

### (1)「生きた証」を残す

自分や家族の人生の「記憶装置」としての自分史

### (2)自分や家族の「生」の掛け替えのなさの「再発見」と「再評価」

①「取るに足らぬ自分（家族）」から「掛け替えのない自分」へ

▽

②「心 塞 意 閉」から「心 得 開 明」へ

### (3)長年培った見識や考え方、技術や経験の伝達

▽個人の無形の知的財産を、地域の財産とする自分史

### (4)人生の「再挑戦」、「リフレッシュ」の機会

▽「活力ある高齢世代」の再挑戦